

（財）日本関税協会常務理事会講演

最近の中国・台湾問題について

なかじま みねお
中嶋 嶺雄
東京外国語大学学長

一、重要さ増す中国の存在

これからの外交問題あるいは国際関係で、わが国にとっていちはば重要なものは、中国との関係であり、それとの関連で台湾の問題をどう考えるか、ということだろう。

ここ数年、朝鮮半島のことやクローズアップされ、最近には南北首脳会談等が行われたが、事柄の大きさからすると、中国問題のほうがはるかに大きい。

これは単に、中国がどう出るのかとか、中国の世界戦略がどうなのかとか、そういった問題もあるけれど、何と言っても、当面の安全保障という問題を取っても、北朝鮮の脅威は確かにいろいろとあるにせよ、きわめて限定的なものであり、それほど大騒ぎして心配するには当たらない。もちろん、日本はそのためには防衛体制をきちんとしておかなければいけない。

一方、中国の脅威のほうは、単に戦略的な脅威のみならず、この社会がどうなるのかといった、中国のいわば行く末そのものが、ひよつとしたら、日本にとって大変な脅威になりはしないかという意味の脅威だと言っているだろう。

たとえば食糧問題、人口問題、環境問題といった、二一世紀の人類にとって非常に重要な問題のどの側面を取っても、中国がからんでくる。そういうことからすると、このような中国問題はいささかも疎かにできないわけである。

その中国は昨年秋、建国五〇周年を迎えた。五〇周年という一つの節目を回顧する中で、二つの大きな問題に焦点を当ててみたい。

二、中国の国内情勢

(1) 法輪功問題

一つは、中国の国内の政治あるいは国内の情

勢である。昨年は、中国にとっては、国内的に見ると非常に深刻な事態に陥っていたことが明らかになった。その中で建国五〇周年を迎えたわけである。

端的に言うと、例の法輪功の問題である。私は昨年の夏、ちょうど法輪功の摘発の最中に中国各地を訪れる機会があった。私どもの大学と交流関係がある長春の東北師範大学のセレモニに出るために、長春にも行ったが、米国にいる法輪功の指導者の李洪智は、もともとこの長春の近郊に生まれ育った人物だから、なおさら大変だった。

そもそも法輪功とはどういうものか。これはチーコン（気功）集団である。気功そのものは日本にも非常にファンが多いようで、私の友人でもある外交評論家の岡崎久彦さんも気功をやっているらしいようである。

しかし、この法輪功は単なる気功の集団であるだけではなくて、一種の新興宗教的な色彩を

持っている。いろいろな気功集団があるようであり、その中で特に九〇年代初頭から急速に中国社会に伸びていったのが、この法輪功である。その法輪功というのはどのくらいの数があるのか。その実態はなかなかつかめないけれども、ひよっとすると、法輪功がらみの信者は九〇〇〇万から一億に近いのではないかとさえ言われている。

中国共産党は、いまどのくらいの黨員を持っているかというと、六三〇万くらいである。つまり、約二〇人に一人が共産党である。その共産黨員は都市のほうに余計に集中しているから都市の場合には数人に一人が中国社会のエリートなのである。農村でも、村長に当たる人はみな共産党の幹部である。そういう人が、この五〇年間、組織の隅々にまで目を光らせて、共産党体制をつくってきた。

にもかかわらず、その目の届かないわずかな間隙を縫って、この一〇年間に共産黨員をはるかに上回る数の法輪功の信者が増大したことは、中国共産党にとっても非常に驚きだったようである。現に、去年四月に法輪功の人たちが、北京の中南海に座り込みのデモを行った。これは、法輪功抑圧に対する抗議だった。

一一年前の例の天安門事件以来、北京の中南海一帯の警備はものすごく厳重で、皆さんも行かれたらお分かりになるが、警察官だけではなくて、人民武装警察、さらに場合によっては人民解放軍がしょっちゅう警備をしている。

だから、その地域への不法な侵入者はすぐ摘発できる。それなのに、あつと言う間にかなり

の数の法輪功信者が座り込んでしまった。これを知った江沢民主席は大変なショックを受けたようだった。彼は密かに視察をして回った。あれほど厳重な、水も漏らさぬ警備体制を敷いていたところに、大変な人数が座り込むという事態が起こった。しかも、気がついてみると、地方・中央の党及び政府の中に、法輪功のシンバがかなり存在することが分かった。

それ以来、大変な法輪功摘発を行って、今日に至っている。つい先日の新聞にも、北京でまたまた法輪功が摘発されているといった姿が出ている。あれほど摘発しても、次から次へと形を変えた人たちが、抗議につながって出てくる。その地下水脈は非常に大きいのではないかと。法輪功以外にも、いろいろな気功集団がある。

それらは学問的には一種の疑似社会集団と言ってもいい。中国では、そういうもののほうが、共産党の正統の組織よりも大きく根を張ってしまったということである。

(2) 空洞化進む共産党

これは最近起こったことから、改革・開放の中国社会の中に、大きな空洞があったということになる。うまく改革・開放の流れに乗った人にとっては、まさに改革・開放のだけれども、乗れなかった人には大変な差別であり、大変に厳しい状況に置かれているわけである。

特に最近の失業者の増大。国有企業を改革しようとするれば、必ずそういう問題が出てくる。だから、国有企業の改革もなかなかむずかしい。

そういうことからの貧富の差の増大や腐敗現象などが、中国社会に、いわば共産党への信頼感の喪失という問題を起こしてきているのである。そして、共産党も、たとえばこの間までは「毛沢東、毛沢東」でやってきて、そのあとは「鄧小平、鄧小平」でやった。この二人はまったく水と油である。鄧小平は毛沢東に批判され、一時は文化大革命で最大の逆賊であるかのごとくやられた。「あんな裏切り者はない」とやられた。彼の時代になると、今度は神様みたいなになった。いま、この二人に次ぐ第三の世代の指導者として、「江沢民、江沢民」と盛んに言っている。

しかし、本当に江沢民が中国の民衆に心から支持されているのか。実は、まったくそうではない。ここに大きな問題があるし、そもそも水と油の最初の二人をつないできたことが問題だったのに、それを一つの正統性の糸でつないで、毛沢東、鄧小平、江沢民というようにやろうとしても、今度、江沢民氏がいなくなると、おそらくまた違った図式が描かれることは明らかである。言ってみれば、そういう正統性の根拠に欠けているし、いま共産党に入る人たちは、マルクス主義や毛沢東思想を信奉して入るわけではない。みんなエリート集団としての利権を求めて黨員になるわけである。最近、共産党の入党者には、労働者や農民がほとんどいない。もともと共産党は労働者の党、農民の党だったけれども、いまはみんな知識人エリート。

こういう状況がある中で、中国社会は実はものすごく病んでいる。図らずも、そのことが法

輪功問題で手にとるよりに明らかになつたわけである。

三、中国の外交事情

(1) ますます遠のく台湾

もう一つは対外問題である。中国にとって対外問題の最大の懸案は、言うまでもなく祖国の統一、台湾との統一である。ところが、建国後五〇年たつても、台湾を統一する目途がまったく立っていない。台湾はますます大陸から遠い存在になつてきている。そのことへの苛立ちが、江沢民をして条件反射的に李登輝に反発したり、台湾問題でものごとく中国がナールバスになつていく最大の理由なのである。

あれほど「祖国の統一」などと言いながら、いま中国の指導者にとつて、台湾を統一する目途はまったく立っていない。ここに大きな問題が残っているわけである。つまり、内政、外交ともに行き詰まつた状況の中で、建国五〇周年を迎えなければならなかつた。

(2) 拡大し続ける軍備

その中国にとって不可欠なのは共産党の独裁体制の維持だから、法輪功の問題にしても、天安門事件以来の民主化の問題にしても、力でこれを抑える以外に方法がないわけである。

だから、そこにまさに軍事力に対する過信と

いう問題があり、対外的にも、このところ中国の軍事力の増強が非常に目立っている。単に軍事力が増強されるだけではなくて、そして、国内的な治安のためだけではなくて、海洋戦略としても、日本との間で問題となつている尖閣諸島や南シナ海を含む、中国のある種の膨張主義としても、中国の軍事信仰にはものすごいものがあるわけである。毎年一五%、多いときには二二・四%という国防費の増大が、過去一二年間ずうっと続いているのだ。

中国の国防費は、人民代表大会つまり中国の一院制の国会で、予算案として表に出る数字である。ところが、中国がミサイルを開発したり、ロシアから艦船など、いろいろな購入しようとしたり、核開発をしたりするようなものは、国防費には含まれていない。したがって、中国の軍事力は、表に出る国防費の数倍、多い推計では一倍という大きさであり、大変な軍事的な膨張をしているのである。

(3) 日本の対中ODA

この問題を考えたら、日本の中国向けODAは明らかに日本のODA原則に違反しているのであり、中国に外交的な意味から供与しているのだけれども、果たしてそれがいいのかどうか。ようやく国内でも問題になり始めているが、大いに議論すべきである。すでに数兆円の規模で積み上がってきている。

しかも、モンゴルなどとは違って、中国は日本が援助しても、それを全然表に出そうとしな

い。この間の北京空港だつて、日本の援助がなかつたら、あんな立派な新空港はできなかった。ようやく日本の援助を認めなければ、日本から支援を受けたという事実は、あいさつにひと言もなかつた。ここにも非常に問題があると言えよう。

四、中台関係

(1) 民主化された台湾

きょうのもう一つのテーマである中台関係に移つてみたい。

こういう状況の中で、台湾は中国とはまったく違った世界を形成しつつある。台湾は、特に李登輝時代の一二年間にものごとく躍進し、内部的には完全に民主化され、いい国になった。この違いが中台関係の核心であり、根本である。中台問題は、煎じ詰めれば、大陸中国が過去五〇年間、台湾の人たちがみずから進んで統一したくなるような国をつくれなかつたこと、国づくりに失敗したということなのである。

台湾の人だつて、ずうっと「祖国」と言っていたし、蔣介石時代には「祖国との統一」と言ってきたのだから、大陸中国が本当に魅力のある国ならば、統一に向けて自分たちから進んで中国の懐に入っていくはずなのに、いまの台湾の二三〇〇万の人たちの中には、まったくそういう気持ちがない。ここにいちばんの問題があると思う。

(2) 中国からの不法難民問題

もっと具体的なことを言えば、いま日本もそうだが、台湾も、中国からの不法難民に悩んでいる。この不法難民の問題は、日本でもきちんと勉強会でもしなければいけないぐらい、深刻な問題になっている。

この間、私もちょっとした盗難事件があったとき、現場のお巡りさんからいろいろ聞いたが、不法在留者とわかっていても、一人の人に開く時間と労力が大変なものだから、見逃す以外ないんだ、と。中華料理屋などにいる人たちが、みんなが就労ビザを持っているとは限らない。留学生の場合は、最近緩和されて、週何時間という就労ができるようになったけれども、明らかに勉強しているとも思えないような、単純労働者を日本は入れてはいけません。法務省もそうである。

表向き働いている人はいいかもしれないけれども、工事現場にいる人などは分からない。分かったら大変である。

一人の人にかかずらって、三か月ぐらいかけて、いろいろと書類をつくって、しかも、日本のいまの法律によると、それを中国に照会しないといけないそうである。中国に照会したって、なかなか返事が来ないから、催促したりしなければならぬ。大変である。そうしてやっと送り返しても、またすぐ帰ってくるそうである。

私は現場のお巡りさんだけではなくて、この問題を担当した警察庁のトップの人とも話した。

日本に来る中国の不法難民は、大体水際で逮捕されたり、摘発されたりしているのかと思いきや、九〇%は日本に入っているそうである。新聞などに、漁船に乗り込んだり、コンテナの中に潜んでいたり、ズブ濡れになって海岸にいたりしたのを捕まえたという報道が出るのは、僅か一〇%だそうである。

一方、日本から中国へ逃げていく人がいるだろうか。いないだろう。これが日中関係の根本なのだ。台湾から中国へ逃げていく人がいるだろうか。いない。いま台湾から中国に逃げていく人などはいない。台湾は、いま福建省の難民に非常に手を焼いている。日本でもいったん潜ってしまうと、なかなか摘発できないが、台湾の場合はなおさらである。言葉もほとんど同じだし、顔つきも同じだから、この不法難民には非常に困っている。こういう事実が、事柄の本質である。

つまり、台湾から中国へ逃げていくこととする人は、だれもいないけれども、ちょっと緩めれば、大陸からはいっぱい台湾に逃げてくる人がいるということである。ここに中台関係の根本がある。非常に単純なことである。

中国は、これを何とかするために盛んに「統一、統一」と言うのだけれども、肝心の台湾の人の心はますます大陸から離れていく。

(3) 台湾地震における中国の失態

特に去年の台湾大地震のときも、日本と台湾とは外交関係がなくても、こんなに結びつきが

強いのかと思わせるぐらい、「加油台湾（台湾、頑張れ）」というスローガンで義援金がすくく集まった。あのときも、大陸は非常にまずいことをした。広尾の中国大使館は、第一勧銀広尾支店に自分で口座をつくって、「一つの中国だから、台湾への募金は自分たちのところを通さなければいけない」ということを実際にやったわけである。それで白金にある台北代表の事務所は、同じ第一勧銀の白金支店に口座をつくった。もちろんこちらのほうが、いっぱい集まった。

台湾が地震で困っているときに、こういうことをやるというセンス、この感受性のなさ、鈍感さが、いまの中国だと言わざるを得ない。

私は、李登輝総統とこの問題でも何回も話し合った。西岸海峡会談での中国側の責任者、汪道涵という人は、上海市長もやった大変な人物である。台湾側の責任者、辜振甫さんという人は、台湾セメントの会長であるだけではなく、台湾の経団連の会長をずうっとやってきたし、大変な親日家である。

台湾大地震の直後に汪道涵氏が、何も言わずに、お金を持って台湾に来たら、台湾は当然迎え入れたらうし、中国にとっては非常によかったと思う。地震なのだから、金を持ってお見舞いに行ったらいいではないか。それなのに、いろいろと難癖を付けた上で、最初に中国が出したのは、確か僅か一〇万ドルだった。

われわれ「アジア・オープン・フォーラム」でさえ、日本円にして一〇〇〇億円を募金して台湾にあげたのに、中国はそのぐらいしかやら

なかつたわけである。その上、いろいろなことを言ったものだから、台湾の人は、日本には非常に親近感を感じたけれども、大陸からは完全に気持ちが悪く離れてしまったという状況だと思ふ。

五、台湾の民主化

(1) 国民党の体質改善

その台湾は、李登輝時代に民主化という大変大きな賭けを成功させた。李登輝氏にとつての民主化とは、単に制度の変更、組織の改革だけにとどまらず、やはり台湾の国民党そのものの体質を変えることもあった。しかも、国民党の主席でありながら、いわば外来政権であった蒋介石・蔣経国時代の国民党と徹底的に対決した。

外来政権の中でも、特に李登輝氏が二年前に総統になった時分は、古色蒼然たる国民党の大幹部が李登輝を取り囲んでいた。それを一人一人撃破していった。それらの人たちは、たとえば蒋介石夫人の宋美齡（現在一〇一歳、米国在住）の衣鉢を持ち出して、その権威で李登輝氏にいろいろ要求する。李登輝氏はそれに対してどう対応したか。

たとえば宋美齡女史は「蔣、宋、孔、陳」という中国四大家族の出で、上海語を話すが、李登輝氏は上海語が分からない。宋美齡さんが何か言っていると、「自分は分からないから、それを文章に書いてください」と。さすがに不当なこと

は文章に書けない。そういう形で宋美齡女史の要求をはねつけた。

具体的には、李登輝氏は当時の郝柏村氏という軍人を参謀総長から国防部長（大臣）にすることによって、彼の軍事的な影響力をそがなければならなかった。つまり、台湾といえども、大陸と同じように、これまでずうっと権力闘争があり、軍が力を持っていた。それをシビリアン・コントロールにするためには、その必要があった。そのときに、その郝柏村がものすごく抵抗し、宋美齡夫人の蔣家一族の力でそれを拒もうとしたので、そういう荒療治もせざるを得なかつたのである。

そうやって、国民党的な体質を内部からえぐり出すことが、李登輝氏にとつて取り組まなければならぬ重要な課題だったわけである。今回の総統選挙でもそうだった。李登輝氏は「国民党はもう時代の任務を終えたのだ」という形で、みずから退陣していった。

実は七月三日の朝日新聞に大きな広告が出ているが、私と李登輝さんとの共著「アジアの知略」をカッパブックスから発売した。李登輝氏はこの中で、これまで語ったことがない、いまお話ししたようなことを含めて、率直に語っている。

(2) 李登輝氏について

三月一八日の台湾総統選挙のあと、李登輝氏が二四日に国民党の主席も退いたのは、なぜだったのか。日本でいえば自民党の総裁は続くと

いうように、その日の朝、常務委員会があつて、結果的には、李登輝氏があれほど支持した連戦候補がいわば弓を引いた形になった。しかし、これもやはり宿命なのである。連戦氏は、副総統として李登輝さんにいろいろ教育されてきたが、最後は李登輝氏の路線を離れていったからである。

この離れた理由にはいろいろある。連戦氏は完全な台湾人ではない。夫人は外省人だし、父親は台湾人だけれども、国民党の蒋介石とともに抗日運動に活躍した人である。

李登輝さんは、家庭がそれほど裕福でなかつたこともあつて、日本の旧制高校である台北高校の出身である。お金がある人は一高か三高にきた。李登輝氏は台北高校から京都帝大に入った。よく新聞は間違つて、京都帝大農学部（農林経済学科である（東大は農業経済学科）。昭和一九年に来て、そこで学ぶが、もう戦時中だから、彼は大阪で徴兵検査を受けて、みずから志願して高射砲隊に配属になり、すぐ高雄に行った。終戦の年には習志野にきた。B29やB24を一生懸命撃っている青年が李登輝。当時、名前を岩里政男と言つた。

B24には何か当たつたけれども、B29にはなかなか当たらなかつたとか、東京が燃えているのが習志野あたりからも見えたとか……。そのときのいろいろな悲惨な光景なども知っている。そういう体験をしているし、日本の教育によって本当に日本精神を体得した。彼が新渡戸稲造などに非常に心服しているのは、そこにあるわけである。

そういう親日感情があればこそ、たとえ今回の台湾高速鉄路（新幹線）のことも、日本から導入するように一生懸命意を用いてくれた。

それなのに日本は、台湾に冷たい。

当初台湾で新幹線のことをやっていた辜振甫氏は、しょっちゅう日本に来て、いつも帝国ホテルに泊まって、わざわざ博多から東京まで新幹線に試乗したりしていたけれども、日本の運輸省の局長はおるか課長も来なかった。辜振甫氏はそれをこぼしていた。それにもかかわらず、日本から新幹線を入れた。やはり日本は地震の国だし、いちばん信頼のおける国だ、と。それが台湾の人たちの、本当に健気なぐらいの親日感情である。

しかし、連戦氏は、私も何回も会って、食事もしたこともあるが、そういう意味では非常に冷たい。というのは、彼はもともと反日論で育った人である。もし彼に弟が生まれたら「連勝」と付けていたはずである。「連戦連勝」である。弟は生まれなかったが自分の子供には「連勝文」「連勝武」と名付けた。つまり、日本に連戦連勝するという反日感情を背負って育ってきた人だという点からも、李登輝氏とは大きな溝があったわけである。

最後に、そういうところが出た。李登輝総統は、自分が野党の民進党へ平和的に権力を移行することができたのは、国民党があったからだ、という。しかし、もう国民党の時代ではない。国民党は歴史的使命を果たした。それが、二四日に辞めるときの李登輝氏の認識である。

(3) 台湾に根づいた民主主義

もう一つ、台湾はとにかく党イコール国である。国民党がすべてであって、国民党がイコール国家である。だから、党営事業はすごく規模が大きい。台湾の国民党がものすごくお金を持っているのは、そこである。しかし、それではダメだ、と。国民が選んだ総統は、国の代表なのだから、それに潔く従うべきだ、という非常にリベラルな考え方である。

李登輝氏は、そういう意味では陳水扁氏が総統になったことに、心の中では非常に満足している。だから、陳水扁氏は、いまでも李登輝さんのところに教えを請いにしょっちゅう行っているわけである。こういう関係である。

これは、言ってみれば、台湾人のアイデンティティーの問題である。一つは民主主義。これによって、台湾は非常に民主的な国になったし、李登輝批判も自由に行われる国になった。

もう一つは、外来政権に渡したくないという気持ち非常に強かったこと。やはり台湾人に渡したい、と。そういう意味では、総統候補の中では宋楚瑜氏はまさに外来政権の代表。彼がかなり票を集めたのは、いわば田中角栄型の政治家で、利権に非常に強いだけに、人気があったからである。しかし、陳水扁氏は李登輝氏があそこまで頑張ったから、李登輝支持票が陳水扁氏に流れた。それで李登輝さんも満足している。こういう構造によって、台湾は国民党九〇年の歴史のみならず、中華世界五〇〇〇年の歴史の中で初めて、民主的にガラス張りの中で、全世界が見ている中で、政権交代が行われた。こういうことはいまままでなかったことである。

江沢民氏や鄧小平氏は、選挙で選ばれたわけではない。中華世界というのはそういう世界である。天子が天によってダメだと言われた結果の易姓革命か、さもなければ、指導者の死による権力交代しかないという世界である。

それをあそこまで見事にやったわけだから、大陸との落差がますます大きくなっていく。僅か二三〇〇万の台湾という小さな存在なのだけれども、そのことが持つ歴史的意味はものすごく大きくて、やがて中国を変えていくのではないかと。実は、大陸の人たちは、そのことが恐ろしいのである。だからこそ、「台湾をブツつおせ。李登輝はけしからん」と言わざるを得ないのである。そう言えば言うほど、台湾は大陸から離れていく。

(4) アジアに残る冷戦

冷戦というものが共産主義と資本主義との戦い、あるいは自由と独裁との戦いだとすれば、アジアにはまだ冷戦が残っている。いま、時代が大きく変わりつつある中で、ちょっと逆噴射が起こっている時代であり、十分注意しなければいけない。

かつては、あれほど対立していた中ソだったのに、最近の中国の対口関係が非常によくなってきた。プーチン大統領なんかとも非常にいいし、そこに北朝鮮も加わっている。南北首

脳会議をやる前に、中国とはちゃんど秘密会議をやっているし、ロシアとの関係もよくなってきた。

そこにまた、モンゴルではこのところ旧共産党のリバイバルみたいな流れがちよつとある。それからベトナム。つまり、アジアには、新しい冷戦が何となく芽生えてきている。たとえば米国のTMDのみならず、新しい防衛体制NMDにも反対するというようなことをやっている。この辺はよほど注意していかなければいけない。そういうときに、まさに李登輝が言うように、本当は、安全保障の面からすると日本は自由陣営だということで、外交関係がないから表向きはできないかもしれないけれども、きちんとした協調関係を米国、台湾とは取っておく必要があると思う。

四年少し前の台湾海峡の危機のときには、実際にそういうシフトが行われて、日米安保共同宣言になり、日米安保ガイドラインになり、今日に至っているということは、私は大変重要なことだと思う。こういう状況が中台関係であり、台湾の現実の姿ではないか。

(5) 台湾の経済情勢

もうちよつと比較して見てみる。台湾は本当によくやっているとと思う。いまや、一人当たりのGNPは一万五〇〇〇ドルである。大陸のほうはようやく八〇〇〇ドルぐらい。広東省や上海は二〇〇〇ドルを超えているけれども、全体的

には米ドル換算で三〇〇ドル、四〇〇ドルという、大変な後進地域が残っている。八〇〇ドルと一万五〇〇〇ドルとの差はものすごい。だから、台湾から大陸へ逃げていく人はいない。

台湾の人口は二三〇〇万。大陸は一三億を超えている。これはものすごくアンバランスである。台湾の面積がちよつと九州ぐらいであることを思うと、非常によくやっている。台湾の貿易総額は、この間まではずうつと大陸とほぼ同じぐらいだった。外貨準備も、いまは大陸のほうが増えているけれども、台湾は千数百億米ドル。貿易総額も千数百億米ドルぐらい。実に見事なパフォーマンスである。

日本は、不況だからと言って、九州だけで台湾ぐらい頑張れるか。人口は台湾のほうがちよつと多いぐらいである。そういうことを考えると、台湾の現実是非常に評価できる。

あの大地震のため経済成長はかなりマイナスになるのではないかと言われたけれども、ほとんど吸収してしまった。二〇〇〇年の成長率は、六・一％ぐらいはいくのではないか。

(6) 技術社会の高度化

ハイテク産業については、皆さんが台湾に行ったら、ぜひ新竹あたりを見ていただきたい。

それから、港湾施設の立派なこと。高雄でも本当にすばらしい。コンテナのエバグリーンとかもそうである。

バイオ製品がまたすばらしい。李登輝総統自身が農業経済学者だったから、農業改善は大変

なものである。台北の南郊のお茶は本当に美味しい。最近中国より台湾のお茶がおいしいというブームがあつて、本当の通は台湾のお茶を飲みに行く。お茶とはこんなに美味なものかと思われようなお茶を飲ませる茶荘があるので、皆さんも賞味されたい。

中小企業やベンチャーがすごい。台湾の場合は、日本とシステムが違つていて、終身雇用制は結局根づかなかつた。そのかわり、自分のリスクで何かを立ち上げようとするベンチャー的な意欲的な精神がある。

私の関係していることだが、台湾の大学。昔の台北帝大、いまの国立台湾大学や国立政治大学は、アジアの中でも、もつとも設備もいし、学術水準もウカウカすると日本の大学以上である。ノーベル化学賞を受けた、李登輝氏とも親しく、陳水扁氏を支持した李遠哲博士が院長のアカデミア・シニカ(中央研究院)は、大学院の留学生が行くと、その日からすぐコンピューター、冷蔵庫、テレビ付きの部屋に入れる。図書館の設備もすばらしい。日本の大学ではとてもそんなふうにはいかない。そういうところを見ると、これは大変なことだという気がする。

六、日台関係の現状

その台湾は、日本とは外交関係がないために、公的には日本はものすごく台湾に冷たい。結局、台湾がいいのは高信頼社会だからである。デパートだつて、中国に行った流通業はみんな撤退

である。ヤオハンの悲劇。結局、上海の大きなヤオハン・ネクステージは中国に取られてしまった。向こうは合併比率をだんだん上げてきて、骨の髄までしゃぶって、ハイさようなら。ヤオハンの本体が倒れようが、いっさい知らない。ジャスコもほとんど撤退する。

それから香港は、日本の大丸もそうだが、ほとんどのデパートは引き揚げてしまった。結局、中国の支配下になってからは、香港はうまくいなくなってしまう。台湾はそれを目の前で見てから、一國兩制なんてことは、とても受け入れられないということになる。

台湾に出ていったデパートは、全部成功している。台湾そごうでさえも、すごい稼ぎがある。それから三越。日本では問題があると言われるデパートが、台湾では軒並みものすごく成績がいい。

そういうことを見ると、高信頼社会であるかどうかということが、非常に大事である。そういう意味で、日本にとって台湾という存在がそこにあることは非常に大事であって、あそこが共産圏になったり、朝鮮半島みたいにしよっちゅう日本を批判するような体質になっては困るものすごく親的なゾーンである。

言ってみれば、それはやはり戦前の日本の台湾統治が、非常に啓蒙主義的な統治であったからである。そもそも台北入城のとき以来、ほとんど犠牲者が出ていない。あのときに日本側を引き入れたのが、いまの辜振甫さんの父親の辜顯榮氏である。辜(コ)一族は、リチャード・クー氏もその一族の一人だが、大変なものであ

る。この一族はもともとは「林」だったけれども、清朝末期に天津の近くで戦いに破れて罪人とされて、辜(コ)に変えさせられた家系である。だから、辜振甫はもとを正せば大陸から来ている。辜振甫の辜(コ)は「無辜」の「辜」、「罪人」という字である。日本ではあまり使われないが……。

そのあたりから始まって、たとえば新渡戸稲造もそうだし、後藤新平がいかに台湾で大きな役割を果たしたかとか、非常に啓蒙的な人たちが台湾を統治している。そういうことに対して李登輝は、「どんな田舎に行っても、水道があつて、電気があつて、小学校があつて、日本のいい先生がいてくれた」と非常に感謝している。「これは大陸中国ではとてもやってくれない。日本だからやってくれた。そのお蔭で台湾の民度が非常に高くなって、衛生も非常によくなった。この基礎の上に、今日の台湾があるんだ」と言うわけである。

それをわれわれが主張するのではなくて、むしろ台湾の人たちが言っているところに、一つの大きな問題があるのではないか。

だからその台湾をもっと大事にしてほしいのだけれども、わが国はどうも冷たい。李登輝さんは、今回の本の中でも言っている。今度、松本でやる「アジア・オープン・フォーラム」にぜひ来たいという強い希望を持っているが、果たして日本の政府・外務省がどんな判断をするのか。私は希望は捨てていけないけれども、当事者であるので、そう楽観もしていない。

しかし、考えてみると、一市民なのだから法

的には何ら拒否する理由はない。李登輝さんが、たとえば東京で石原慎太郎知事と会って、反中国の大合唱をするとかいうことであれば、それは刺激的だけれども、李登輝氏は、まさに学者李登輝としてフォーラムに出たいということであつて、これを拒否するならば、日本の主権はどこにあるのかと言いたい。中国の反対だけが拒否の理由である。日本にとつても非常にむずかしい課題を突きつけられているわけではある。

ちなみに、この間、李登輝氏がイギリスに行ったときも、中国はいろいろ妨害をした。シュンペーター学会の名誉会員になるということで、また、お孫さんがロンドンの高校を卒業するということで行った。そういう半ば私的な旅行でも、サッチャーにちゃんと会つたり、イギリス議會を訪問したりしている。

日本は、李登輝氏が来て、国会を訪問できるかというところには非常に大きな格差がある。しかし、一市民だから、日本が本当に自由と民主主義の国であれば、当然に李登輝さんの入国を拒否する理由はないと思うが、どうだろうか。

本稿は、七月三二日開催の(財)日本関税協会常務理事会における講演をまとめたものである。

「コミュニケーションの仕方は風土や育ちや教育によって違ってきますね。国の内外を問わず、ビジネスにおいては自分の意志を伝えるだけでなく、相手を納得させる話し方が大切です。日本人同士でも個人差がありますが、国境を越えれば言葉や文化が大きく異なるというもうひとつの要素が加わります。ただし感情という部分に関しては人間として変わらない点が大いだと思います。家族を愛するとか、人を大切にするといった普遍的な部分がありますね。つまり相手の心を捉えるということに関しては世界共通の能力があるはずで、まさにEQはここをターゲットにしている訳で、EQ能力を高めることによって、言語と文化を超えたもっと基本

と国際ビジネス・13

理論とその実践

ナル・コミュニケーション——

まごしえみこ
馬越恵美子

大学助教授 学術博士

的な次元で人とうまくコミュニケーションできるようになるのではないのでしょうか。人としっかりと意思の疎通を図れるということは、仕事の面で大きなプラスになりますが、それだけではなく、友人との付き合いや家庭においても良い結果を生み出すこととなります。」

このようにEQの能力を高めることによって、ビジネスのみならず人生のあらゆる場面において自分と相手を共に活かし合うことができるのである。まさにEQとは、「コミュニケーションの機微を科学的に解明するツール」ではないだろうか。

教育にEQを活かして次世代を育てよう

このようにビジネスの世界ではEQを取り入れようという機運があるが、もっとEQを必要

としている分野に官庁と教育現場があると思う。両者とも競争原理が働かないために、民間企業では考えられないような「時間の無駄」と「対人関係の稚拙さ」が見られることがある。(もっとも官庁も昔とは随分違って対応がソフトになったと聞くし、大学でも少子化のあおりを受けて競争原理が徐々に効きはじめてはいるが。)

心理学者でありEQジャパンの研究開発担当取締役である松下信武氏は、教育現場にEQを導入した経験から、次のように語っている。

「1年半前から神奈川県私立中学で、授業の一環としてEQ教育を行なっています。はじめにやったことは、自分の感情を素直に表現することで、その結果、一時期、授業が成り立たないくらい混乱しました。でも自己の開放が十分に進むと、感情の調整ができて、相手の心を察知することができるようになるのです。結果として、適切な距離感をもってお互いに接することができるようになりました。「ゆとりの教育」と謳うのなら、単に授業時間数を減らしたり内容を簡単にしたりするのではなく、EQ能力を高めて心のゆとりを持てるような教育を行なうべきではないでしょうか。」

心を病む青少年が増加し社会的事件を引き起こしている現状を見ると、早急にEQを教育現場に導入して、次世代の総合的知性を育むべきだと思うが、そのためにはまず教師自らがEQの検査を受けて己を知り、EQを高める努力をするべきであろう。

インターネットの普及によって、情報の収集や意思の伝達方法が大きく変わりつつあり、生活の隅々まで無機質な通信方法が浸透してきた今日こそ、人と人とが対峙し、面と向かってお互いを理解しようと努める大切さを確認する必要がある。EQの能力を高めることによって、直接会って話をするのか間接的に媒体を介するのにかかわらず、心の通うパーソナルなコミュニケーションができるようになると思う。EQはIT時代にこそ必要不可欠な“知性”ではないだろうか。